匠の技 ―2― 宮島杓子

伝統を守りながらも、
フロンティア精神で進んでいく―
職人として生きることを決意した、
木工に人生をかける
若き匠たちの声を聞く―。

みやざと・あつき
宮郷　厚樹さん
（37歳・宮島町）

東京の大学を卒業後、郵便局に勤めるが、杓子問屋であった父の家業を継ぐ形で27歳でこの道に。200年以上も続き、宮島みやげの定番の杓子。その宮島杓子専門店「宮島杓子の家」の後継者として、日々腕を磨いている。「同じように見えても一本一本の仕上がりが違うんです」と宮郷さん。使われる木材はクワ、サクラなどの固い材質が多い。

写真__1　通常の鉋（かんな）では杓子は削れない。改良を重ねた道具類。写真__2　木目を生かした宮島杓子。写真__3「ゼロからのスタートだったことで、素直に教えてもらうことができます」と宮郷さん。

宮島杓子

18世紀末、修行僧の「誓真」（せいしん）が、島民救済のため厳島神社を参拝した客のお土産に、琵琶の形を基に作った杓子を試作し、島民に教えたのが由来とされている。「すくい取る」、「めし（飯）とる」から幸運、勝運を招く縁起物とされている。

杓子の家
廿日市市宮島町488
問合せ　☎㊹0084

広島を代表する伝統工芸の一つである杓子。明治以降には鉄道の発達とともに来島者が増加。土産に「宮島」と焼印が押された杓子を持ち帰った。また、問屋を経由して全国に広まったため、宮島は有名な杓子の産地となった。

「料理人さんたちの中には、今でも杓子のことを『宮島』と呼ぶ人もいますよ」と、宮郷厚樹さん。宮島伝統の杓子を作り始めて10年。しかし、始めた当初、杓子作りはまったくの素人だったという。

先達が残してくれた手作りの杓子を手本に、第一線を退いた職人さんに教えを請い、伝統工芸後継者育成事業に参加するなど、日々研さんを重ねている。

「10年前に地元に帰ってきたとき、現役の杓子職人は途絶えていました。宮島杓子はせっかく先人が遺してくれた財産です。何とかしなければいけないと思ったんです」。

工業製品ではない宮島杓子は木から鉋で削り出す職人技。ピークだった明治の終わりころには150人の杓子職人が宮島にいたという。

「そのころは、年間の出荷量が700～800万本あったそうです。腕のいい職人は、1日500本削っていたと言われています。腕一本でそれだけの仕事をこなしていた先人には頭が下がります」。

「道具は財産です」と宮郷さん。大小の鉋、こさげなど、さまざまな道具を使い分けて杓子作り出す。道具を作りだすところから職人としての就業が始まっていると言う。

「昔の職人は知恵を絞り、一からその道具を作っていました。その積み重ねが伝統になったんだと感じています」。

宮島杓子は、経済産業大臣指定伝統的工芸品に指定されているが、手彫りで削りだす手法でないと、伝統工芸品としては認めてもらえない。現在、手彫りで杓子を作っている職人は、宮島で宮郷さんただ一人。

「木が本来持っている温もりが伝わればと思っています。何より、形に残る仕事に携われることは幸せなことです」。

若き匠は、現在、伝統工芸士を目指し、挑戦を続けている。

「職人さんたちを引っ張りながら、夜遅くまで木と向き合って仕事をする父が、かっこよく見えました」と話すのは鈴木辰徳さん。家具を作るお父さんの背中を見て育ち、中学を卒業する時には、すでにこの世界に入ろうと決めていたという。

現在は、無垢板や、一枚板を使ったテーブルをメーンに、その製品のほとんどを自社生産で作っている鈴木さん。15年くらい前まではベッドを量産していたが、外国製品に押されてきたため、お客様の声を聞き、向き合って作ることのできる一品物の家具作りにチェンジしていったとのこと。

「木は使い込み、年月が経つほど質感や色も変わって味が出ます。もし、傷が付いても鉋がけをすれば治りますし、親から子へ、子から孫へと代を越えて使っていただけます。オーダーメードの商品だと完成までに2カ月くらいかかりますが、手作り家具の良さはまさにそこにあり、それだけ長く使える商品作りを心掛けています」。

家具作りで最も重要な作業が鉋がけ。「木の表面を最大限滑らかにするには機械では限界があります」と鈴木さん。それはミクロン単位の世界で、人の手でないと微調整がきかない。熟練した鉋がけの技術が、木目をはっきりとさせ、本来持っている木の美しさを引き出す。「だから鉋の刃を砥ぐ技術が重要なんです。木を削るより、刃を研いでいる方が長いですね」と笑って話す。

鈴木さんは2年前、全国から大工、建具、家具職人などが集まり、その技を競う「削ろう会全国大会」で、5ミクロンを削り出し、審査員特別賞に輝いた実績もある。

「厳しい環境の下で育った木の中には、節や割れなど、人間でいうと、しわやしみにあたるものがありますが、それはその木の歴史。そのような部分こそ無垢の木が持つ魅力だと思っています」。

「若い人たちに『職人ってかっこいいな』と思ってもらえるように頑張りたいです」と、若き匠は話してくれた。

店内には一枚板の天板や、テーブルなどが並ぶ。「木が持っている力は大きい」と鈴木さん。中でも無垢の一枚板の力強さは群を抜いているという。節や木目など、その木が持つ個性を大事に製作すると言う。

㈲常藤家具製作所
販売店名「木久楽」
廿日市市宮内4188－2
問合せ　☎㊴2479

写真__1　「オリジナリティを大事にしています」と、鈴木さん。写真__2　テーブルの下の見えない所にも手を抜かない。写真__3　地味な作業の鉋がけが職人の腕の見せどころ。鉋の調整に気を使う。

匠の技 ―3― 家具職人

すずき・たつのり
鈴木　辰徳さん
（24歳・宮内）

中学を卒業後、北海道の美術工芸高校でデザインを、富山の建築関係の専門学校で家具を学んだ後、他の視点や技術も必要と富山の建具屋に就職。2年前から㈲常藤家具製作所の3代目として日々研さんしている。「刃がいいと表面が鏡のように仕上がります。包丁がいいと刺身がおいしいのと同じですね」と鈴木さん。手鉋は木目の美しさ、木の持つ艶を引き出す。思わず触ってみたくなる滑らかな木肌の天板はこうして生まれる。